The Slice Serve Makes a Comeback
(スライスサーブの復権)

デニス・バンダーミーア

ヤニック・ノアとアーザー・アッシュは、すばらしいスライスサーブの持ち主でした。ジョン・マッケンローは、得意のスライスサーブを相手のバックハンドに打ち込んでネットに詰め、相手のパスを難しくしていました。レシーバーはコートの外一杯に降り出されてしまうので、ダウンザラインのリターンはマッケンローのラケットに吸い込まれて行くようになり、殆ど勝ち目がなかったのです。クロスコートのリターンに対しては、マッケンローは単にネットに詰めるだけでパスに届いたのです。左利きであったマッケンローは、単に相手の弱いサイドにサーブを打ち込むだけで、ポイントにつなげることができたのです。

しかし、エースを取りに行くサーブを使い始める時代の流れと共に、ワイドに打つスライスサーブが使われることが少なくなってきました。しかし、こういったビッグサーブを打つことで肩を痛めるケースが増えてきたので、また、スライスサーブが見直されるようになってきたのです。プレーヤーが効果的なスライスサーブを１０％でも使えるならば、プレーヤーのサーブ生命は非常に長くなるのです。

スライスサーブの復活に寄与した他の要素としては、解像度の高いスローモーション撮影ができる安価で軽量なビデオカメラの普及があげられます。これを用いることで、誰でもがスライスサーブや他のストロークの動きをはっきりと見ることができるようになったのです。スライスサーブの動作の特徴は、打球時にラケット面が回外動作をし、すぐに回内動作に切り替わってラケットヘッドの動きを加速するように動いていることです、

この「回内」動作が理解できれば、この動作を、鋭角に角度をつけたストロークや、デリケートなタッチでのクロスコートのドロップショットや、追い込まれて打点がかなり後ろになったボールの処理など、様々なストロークに利用できるのです。こういったことからしても、スライスサーブを見直すことは必要なことでしょう。